



年頭に当たり

— 希望と夢に満ちた年に！ —

平成30年が始まりました。平成の時代もあと1年4ヶ月となりました。今年も世界中の人々が安全・安心で、明るい話題が多く、笑顔があふれる一年になることを願っています。

【一富士 二鷹 三茄子】

子どもたちには新しい夢や目標に向かって、着実に前進して行ってほしいと思っています。

私たち教職員も、子どもの実態に応じた指導を行い、教育目標に迫っていくことができるよう努力してまいりたいと思っています。そして、保護者・地域の皆様とのつながりを大切にしながら、積極的に教育活動を推進していきたいと思っています。3学期も皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

毎年この時期はインフルエンザが心配されますが、本校では12月から流行していますので、ご家庭でも手洗い・うがいの励行、室内の換気等の予防に努めていただくなど、お子様の体調管理をお願いします。

新年を迎え、改めて「本校の教育目標」と「大人の生活心得」を再確認し、学校と保護者・地域が力を合わせて、子どもたちの健全育成を図っていきたく願っています。

◎ 中央小の学校教育目標 『心豊かにたくましく生きる子どもの育成』

- あたたかい心もち、仲よく協力する子ども < 仲よく >
- 創造性に富み、知性豊かな子ども < かしこく >
- 健康で明るく、根気強く努力する子ども < 元気よく >



〔始業式で元よく校歌斉唱〕

子どもの健全育成に向けた大人の生活心得(岡山県・県教育委員会・県警察作成)

「おかやまっ子と育む 大人のハカ条」～大人が変われば 子どもも変わる～

- ①生活リズム“早く起き 子どものために 朝ごはん”
- ②あいさつ“気持ちいい 朝のあいさつ 大人から”
- ③ルール・マナー“教えよう やっていいこと 悪いこと”
- ④感謝の気持ち“ありがとう」「ごめんなさい」を大切に
- ⑤子どもへの関わり“手を止めて 顔を見て聴こう 子の話”
- ⑥しつけ“心から しっかり褒めて きちんと叱る”
- ⑦子どもの見守り“どの子にも 地域みんなで 声かけを”
- ⑧地域との関わり“参加して 深める絆 地域の輪”

回顧録 ⑧「やったらできた」たけの子村 藤岡博昭先生

～ 「一粒は土の虫のために、一粒は小鳥のために、一粒は収穫のために」 ～

たけの子村の藤岡博昭先生をご存じでしょうか。元は広島県で中学校の教員をされていましたが、今から40年前、(50歳の時)知的に障がいのある教え子と一緒に生活を始めるために教員を退職された方です。その藤岡先生の講演を30年前に拝聴したときにとっても感動したので、同僚を誘って真備町にあるたけのこ村を訪れ、藤岡先生からお話を伺いました。囲炉裏を囲んで、先生はそれまでの生き様について2時間近く淡々と語っていただきましたが、すぐに先生の話に引き込まれていき、感動の連続でした。話を聞き終えたとき、人間は愛とひたむきに生きる気持ちがあれば、どんな状況下であろうとも生き抜くことができるのではないかと感じたことをはっきりと記憶しています。そして、心豊かに生きるとはどんなことかを考える機会を与えていただきました。私がこれまでで最も感銘を受けた先生の一人で、まさに「できた人」に出会ったという印象でした。訪問時にいただいた先生の生き方が分かる原稿がありましたので、紹介します。

“太陽と土と水があればいい” たけのこ村 万年やいくい助役 藤岡博昭

— のんき・こんき・げんきのたけのこ村は 日本一小さな村 日本一の貧乏村 日本一心の豊かな村 —

「木でご飯が炊けるんか、木で風呂が焚けるんか、びっくりした」 入村した知的障がいの十五才の少年のことばであった。生活が自然から、かくも遠く離れてしまったのかと、むしろ私の方が大きなショックを受けた。吉備の山里に「たけのこ村」と名乗って十五年になる。知的障がいの教え子たちが自らの力で生きていける場をつくらうと始めた。

思えば四十六年末のドルショック、石油ショック後、就職させていた教え子たちが、かたばしから解雇された。正直で一日も休まず、一生懸命働く少年たちなのに「能率が悪い」の一言で簡単に解雇された。「先生、馬鹿にされない、絶対にやめさせられない、安心して働けるところがほしい」と訴える彼らを前に教職を辞めた。山を開墾し、山羊や鶏を飼い、農作物を植え、自給自足しながら、庭や備前焼の作品をつくって現金収入を計ってきた。公的援助は一切受けていない。「一杯の水を与えられるより井戸を掘ろう」という開村の時の決意を貫いてきたからだ。ランブと山水の生活に耐えたのもその頃である。未だに、大豆入り麦ご飯で一汁一菜の粗食を続けている。食へ盛りの青年たちを抱えての「村の暮らし」は、今とき信じられないくらい慎ましく、村の財政は貧しい。しかし、太陽と土と水があれば生きられるものだ。自然の恵みは弱者にも平等である。苦しみも喜びも共に分かち合うことを学び、屈託のない明るさとたくましい青年が育った。

もうすぐ、大豆の収穫期が来る。村民の主食であり、味噌造りの原料となる。その大豆の蒔き方は、河野進老人から教わった。土の中に三本の指を差し込んで三つの穴を開け、そこに種を蒔く。「一粒は土の虫のために」「一粒は小鳥のために」「一粒は収穫のために」「これが百姓の心じゃ」と。生きる手段だけでなく、生きる心も学んだ。また、植竹づくりをする青年たちは、備前焼を習得し、自給自足に欠かせない茶碗やすり鉢などの日曜雑器をつくり、生活を豊かにする「土の文化」を身につけていった。“のんき こんき げんき”は、たけのこ村の哲学である。山裾の荒地に挑んで十五年!。「能率が悪い」と、職場を石もて追われた若者たちが、“村づくり”という大ロマンと大いなる希望を抱いてたくましく生きる。そこに “与えられ、保護される福祉” と異なる青年群を発見することができた。

障がい者が障がいを克服して生きたら、それは障がい者ではない。今、たけのこ村に現代社会の「心の病める人たちが」訪れてくる。ほんとに豊かな生活・福祉社会とは何だろうと考えさせられてしまう。自然と人間と動物が共存して生きてゆく「日本一貧しい村」の暮らしが、何と心豊かに思えることが。だれもが、真似のできることではない、と言えはいい。が、「私でもやったらできた」というのが、私が一番言いたいことである。

詳しく知りたい方は、『やったらできた「たけのこ村」貧乏奮闘記』 著者 藤岡博昭 講談社発行をご覧ください。

「やったらできた」……やらなければ物事は始まりません。まず身近でできることから実行に移し、目標に向かって、勇気をもって、最後まであきらめずに、お互いに挑戦していきましょう。